

自己評価表

教育方針	幼児児童生徒に対し、一人一人の障がいの状態やニーズに応じた教育を行い、個性を伸張するとともに豊かな心を育み、将来自立し、社会参加のできる人間を育成する。	重点目標	1 明るく楽しい学校にします。 2 一人一人が主体的に学べる学校にします。 3 安心・安全に学べる学校にします。 4 保護者・地域から信頼される学校にします。
------	--	------	--

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
明るく楽しい学校にします。	気持ち良い挨拶の励行	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童生徒会を中心に「あいさつ運動」を行うなど、幼児児童生徒が自ら挨拶を行うよう促しをする。</li> <li>・教職員が率先して笑顔で挨拶をするとともに、<u>幼児児童生徒の名前を呼んで挨拶や言葉掛けをするなど、つながりを深め、明るい学校を目指す。</u></li> <li>・指導員が手本となるよう率先して挨拶し、寄宿舎生が自発的に笑顔で挨拶する寄宿舎生を目指す。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・例年どおりのあいさつ運動はできなかったが、感染対策を図りながら中学部での運動を行った。</li> <li>・放送委員の朝の放送が、挨拶を含めた活気ある学校生活の始まりになっていた。</li> <li>・教職員は意識して幼児児童生徒、保護者に明るく挨拶をしており、自然と打ち解けた雰囲気を感じられた。</li> <li>・指導員が率先して挨拶することで、寄宿舎生も笑顔で気持ちの良い挨拶ができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感染症対策を講じた上で啓発活動を行う。</li> <li>・感染症対策の意味も含め、朝の放送を中心に全校放送について委員以外も実施してはどうか。</li> <li>・今後も教職員が率先して笑顔で話し掛け、手本となる挨拶をすることを心掛け、明るい雰囲気づくりに継続して取り組む。</li> <li>・手本となる挨拶に心掛け、明るく楽しい寄宿舎を目指す。</li> </ul>
	各部の連携による一体感・充実感のある活動の推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各部の独自性と一貫性の両面を大切に、将来の生活への見通しをもった指導の充実を図る。</li> <li>・日々の学習をはじめ、<u>学校行事等が充実したものになるよう、各部連携を図り、情報共有や協力体制の構築に努める。</u></li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ネットワーク等を活用し、情報の共有や協力体制を図ることができた。また、学校行事は形を変えての実施だったが、各目標を達成することができた。</li> <li>・従来学部や全校と一緒に活動する機会が少なかったが、オンラインの活用により、互いを身近に感じられることもあった。</li> <li>・中3生(知的代替)の高等部作業体験を計画したが、コロナウイルス感染症の影響で見学のみになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育活動が充実するようオンラインの活用も含め、実施方法を工夫する。</li> <li>・学部、学年間のつながりを大切にすることで、各部等での情報共有や協力をしながら実施できるよう配慮する。</li> <li>・全校共通行事など、学習の単元設定や目標を系統だったもののできるよう、各学年、各部の連携を図る。</li> </ul>
	一人一人の主体性と意思決定能力の育成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・寄宿舎生活の中で、<u>基本的な生活習慣の定着と将来の社会参加を見据え、社会に適應する生きる力を育成するよう努める。</u></li> <li>・<u>実態把握を十分に行いICTの活用を含めた個々に応じた自己選択や自己決定の方法を模索する。</u></li> <li>・<u>個別の指導計画を生かし、学級担任や授業担当者と連携して幼児児童生徒の主体的な活動につながる指導・支援を行う。</u></li> <li>・個別の指導計画を活用し、学級担任や授業担当者、自立活動課員等が連携して<u>個々の課題を明確にし、幼児児童生徒が自己の目標を決めて活動し、自己評価できるよう支援する。</u></li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・寄宿舎生の発達段階や障がいの程度に応じた支援目標を設定し、感染症対策を講じながら、支援方法を工夫し、指導員間の共通理解のもと支援した。</li> <li>・各学級や学習グループ内で個々の実態や目標について情報を共有し、学習内容や指導方法の検討をすることで、幼児児童生徒が主体的に授業に取り組めるように共通理解を図った。</li> <li>・自立活動研修にグループ協議を取り入れたことで、実態や支援方法、課題の共通理解が図れた。また、自立活動の時間における指導では、幼児児童生徒が目標を決め、自己評価するよう自立活動課員から働き掛けたことで、主体性の育成を意識した指導が行えた。</li> <li>・達成可能な個別の目標となるよう複数の目で実態を把握し、個別の指導計画の作成を行い、幼児児童生徒の変化や成長について具体的に分かりやすく評価するよう努めた。</li> <li>・実態を把握し個々に合った活動内容を用意することができた。教材教具の工夫やICT機器の活用など教職員が連携して取り組もうとしており、画像で選択肢を提示するなど、意思決定や主体的な学びに活用する取組が見られた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・寄宿舎生が目標を自覚し、満足感や達成感を実感できる支援目標を作成し、基本的な生活習慣や生きる力の育成を目指す。</li> <li>・実態把握を十分に行い、グループ内の活動においても、個々に応じた自己選択や自己決定の機会を設け、実践を深める。</li> <li>・グループ協議を取り入れた自立活動研修を継続する。個々のニーズに応じたより実践に役立つ研修を少人数で実施し、学校生活全体を通して自立活動に取り組む意識を高める。</li> <li>・幼児児童生徒が自信をもって活動したり、人と関わったりできるよう、称賛などの言葉掛けを工夫したり、自己肯定感が高まる学習課題・授業内容の設定をしたりする。</li> <li>・主体的な活動を引き出すためにどうすればよいか、みんなで考え、より良い方向性を打ち出す。</li> <li>・関係教職員で幼児児童生徒の実態把握に努め、ICT機器の活用も含め主体的に取り組める活動を工夫する。また、そのためのニーズの高い研修の機会を設ける。</li> </ul>
	互いに認め合い、尊重し合える人間関係の構築	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>各学校行事等を円滑に準備・運営できるよう各学部との連携を図る。</u>また、<u>幼児児童生徒一人一人が主体的に活動できるような環境づくりに努める。</u></li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケートからも対応が必要なケースは見受けられなかった。感染症対策により計画されていた地域交流はオンライン等で行った。</li> <li>・感染予防対策を行う中で様々な制限もあったが、オンラインの活用など工夫をしながら、学校行事や学習活動を実施し、教育活動や人との関わりが充実するよう努めた。</li> <li>・学校間交流を対面で実施することができなかったため、学校紹介をする手紙の作成を行った。互いの学校の特徴などを紹介することで、互いを理解することにつながった。</li> <li>・生徒に役割を与え活躍できる場を多く作ろうとしている。主体的に活動するまでの言葉掛けや見守りが上達してきた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校間交流の中で学校の特色(施設や授業の様子、具体的な支援機器などを含む)を互いに紹介することにより、相互理解を深める。</li> <li>・幼児児童生徒一人一人の役割や活動内容、支援方法が本当にその幼児児童生徒にとって有効かどうか教職員が共通理解を図り、実践に移す。</li> </ul>

一人一人が主体的に学べる学校にします。	<p>分かる喜びが味わえる授業実践と確かな学力の定着</p>	<p>・「授業ビデオ・学習委員会・教材庫のデータ」を活用し、教材・教具や支援の工夫をすることにより、幼児児童生徒が自分から活動する環境を整える。          ・ICT機器を活用し、自主的に学ぶ姿勢を培うとともに調べた内容に疑問を持ちたり感動したり、学習する喜びを味わいながら学力の向上を図る。  <u>・ICT機器の有効な活用事例を蓄積、発信し、一人一人が主体的に調べ、分かる喜びが味わえるような授業実践に生かす。</u>          ・学習における目標や到達度を明確にし、取組について認めたり称賛したりすることで達成感が味わえるようにする。          ・目標や指導上の工夫、意図と手立てを明確にし、達成度を評価しながら、授業改善に努める。</p>	<p>・コロナ禍で授業ビデオや授業反省会の資料は全校に周知し、各自での研修とした。学習委員会や教材庫のデータの紹介は新任者のみに行った。各教科やグループで実施する教科等を合わせた指導において、データを蓄積し活用している。          ・ICT機器の有効な活用事例の蓄積、発信を進めた。授業の中での機器の活用は格段に広まり、個々に応じた教材教具を工夫することで児童生徒の主体的な学びにつながった。          ・校外での学習が制限される中で、各学級（幼児児童）に応じた遠隔体験学習の実施により、通常とは違った形態での学習や人との触れ合い（関わり）ができた。          ・ICT機器の利用や体験的な活動を増やすことで、生徒の自主性が高まった。また、生徒に対しての言葉掛けが効果的になり意欲が高まる生徒が増えた。</p>	<p>・教科会に全教職員が所属し、幼・小・中・高等部それぞれの課題を出し合い、研修目標、内容を決め研修を行う。年度末には、研修内容を全校に周知し、PDCAサイクルで授業改善につなげる。          ・個に応じた活用の工夫に生かせるようICT機器の有効な活用事例の蓄積、発信を進める。          ・目的や目標を明確にした遠隔体験学習など、オンラインを活用した学習を計画的に年間の学習の中に位置付け、様々な学習や人との関わりの機会が設けられるようにする。          ・体験活動やICT機器の活用を通して「分かる喜び」や「できる喜び」が実感できるように最小限の支援で関わるようにする。</p>
	<p>個に応じたコミュニケーション活動の推進と自己表現力の育成</p>	<p>・幼児児童生徒の表情、言葉、動作による「表現」を肯定的に受け止め、複数の教職員で表現の理解を共有し、<u>幼児児童生徒の円滑なコミュニケーションが広がるよう支援する。</u>  <u>・個に応じたICT機器の利用ができるようアプリ等の情報集約や提供を行う。</u></p>	<p>・自立活動研修で個に応じた支援方法や代替機器の活用を取り上げ、コミュニケーション支援について身近な教職員が話し合い、支援の充実につながった。一方で、情報機器やコミュニケーション代替機器の活用の達成度がやや低い教職員が2割弱いた。          ・各教育課程で使用できるアプリを集約した表を作成し提供を行った。アプリを実際に使ってみる機会を設けたり、自主的な勉強会につなげたりすることで、個に応じた課題や操作を模索しながら幼児児童生徒のコミュニケーション手段の選択や表現力の向上に取り組めた。</p>	<p>・代替機器の活用を含めたコミュニケーション支援の具体例を自立活動研修で取り上げ、身近な教職員が情報交換できる場の設定を行う。          ・授業に生かせるICT機器の活用について引き続き、研修や情報提供を行う。</p>
	<p>進路希望の実現に向けたキャリア教育の推進</p>	<p>・キャリアガイド教室の前にキャリア教育全体計画や指導内容表を確認し、目標や支援内容に反映するとともに、実施後に今後の学習にどう生かすか話し合い報告する。  <u>・幼児児童生徒一人一人が将来、地域社会で生活していく上で必要な力が何かを考え、日々の実践に生かす。</u>          ・キャリア教育全体計画に基づいた個別の指導計画、各教科等の年間指導計画を作成し、発達段階に応じたキャリアの育成を目指す。また、評価の観点との関連を示しながら指導と評価の一体化を図り、日々の実践に生かせるようにする。</p>	<p>・年度途中で「キャリアガイド教室の成果と課題」の表を作成したため、計画段階で目標や支援内容を十分に検討し、年間指導計画作成時に身に付けた能力や態度が意図的・継続的に育成に向かう指導を意識しづらかった。          ・学校公開セミナーや中学部技能検定講座、キャリアガイド教室などを通して、児童生徒が地域社会で自立していくために必要な力の育成を図った。          ・キャリア教育全体計画に基づいた個別の指導計画、各教科等の年間指導計画の作成、評価を通して発達段階に応じたキャリアの育成を図った。</p>	<p>・年間を通して身に付けたい能力や態度が意図的・継続的に育成されるよう、年度初めに全校教職員に対して「キャリアガイド教室の成果と課題」の活用方法を説明する。実施後に、学習内容等へいかに反映するか今後の取組についても話し合うよう働き掛け、系統性ある指導を意識した授業づくりにつなげる。          ・キャリア育成のための取組を、進路だより等を通じて周知する。          ・キャリアの視点と自立活動や教科との関連を示し、授業計画や個々の目標設定に生かせる内容を提供する。</p>
安心・安全に学べる学校にします。	<p>危機管理意識の向上と緊急時対応の徹底</p>	<p>・防災・安全学習やショート訓練を通して、自分の身は自分で守る力を身に付ける。          ・より一層幼児児童生徒との信頼関係づくりに努め、いじめや児童虐待の兆候に早く気付けるようにする。          ・インターネット等によるいじめを防止するために、教員や幼児児童生徒への啓発の機会を増やす。</p>	<p>・新型コロナウイルス感染防止対策のため、幼児児童生徒が集合しての避難はできなかったが、火災対応訓練ではTV中継で消防署員による講話を、不審者対応では教室での身の守り方についての訓練を初めて実施した。また、教職員研修として無線機を使用した避難訓練を行い、報告と不明者捜索の手順について確認した。          ・年に2回のいじめアンケートを実施し、対応が必要となるケースは見受けられなかった。          ・いじめや虐待についての県からの通達や事業・リーフレットについて、適切に周知した。</p>	<p>・教職員研修を通して非常時対応について周知を図り、可能な範囲で学校行事としての避難訓練を実施する。          ・いじめや虐待についての県からの通達を丁寧に周知するとともに、児童生徒向けアンケートを実施し、いじめの実態把握と迅速で適切な対応に努める。</p>
	<p>個に応じた摂食・給食指導の充実</p>	<p>・給食委員会を通して、安全安心な給食指導を行ったり、<u>児童生徒のニーズの把握、対応を図る。</u>          ・摂食指導推進委員の研修の充実を図り、リーダーシップを発揮して学年等グループの教職員に情報を提供したり、<u>指導方法を検討したりするなど、教職員間での学びの機会を増やす。また、摂食指導全体研修により、教職員一人一人の摂食指導のスキルアップを図る。</u></p>	<p>・給食委員会として、当初の目標を達成できた。          ・異物混入事例があったが、インシデント事案として捉え、再発防止を徹底した。          ・口腔ケアの実践を狙って、自立活動課・健康安全課が連携して研修を重ねた。          ・コロナ禍で研修が難しい中、主にオンラインで摂食指導推進委員会を中心とした研修や外部専門家を活用した研修会を実施し、教職員一人一人の専門性の向上に努めた。また、事例検討会を行い、児童生徒の実態に応じた摂食指導や支援方法について学びを深めた。</p>	<p>・給食委員会等を通して、改善につながる意見や児童生徒のニーズなどを把握し、より良い給食指導や提供に努める。          ・これまで積み上げてきた安全策を確実に踏襲するよう、学校と厨房間の緊密な連携を図る。          ・安心、安全な食事介助、摂食指導を目指し、研修会の充実を図る。また、外部専門家や教職員間の連携を大切にし、教職員一人一人の専門性の向上に努める。</p>
	<p>安全な医療的ケアの実施体制の整備</p>	<p>・医療的ケア安全委員会や学校医等健診、指導医巡回指導などで医療的ケアに関する検討や改善を行い、医療的ケアを必要とする幼児児童生徒が安全で安心できる学習環境の整備を行う。</p>	<p>・教職員への配布物や会の進行について、内容を精選し分かりやすくした。また事故をなくすために手技の手順書を図式化し分かりやすくした。</p>	<p>・今後も関係者・関係機関と連携を取り、マニュアルや手順書などの充実を図りながら、より安全な医療的ケアの体制整備に努めていく。</p>

	医療機関等との連携・協力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児児童生徒が健康で安心して学べるよう、子ども療育センターと連携・連絡を密に行い、共通理解を図っていく。</li> <li>・子ども療育センターとの連絡会や随時の連絡を密に行い、共通理解や確認に努め教職員に周知を図る。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナウイルス感染症対策を迫られる中、緊密な連携を行い、共通理解や協力体制が構築できた。</li> <li>・子ども療育センターと必要な情報交換はできたが、窓口、生活指導面での情報交換量が限られて連携面で協議や情報交換が必要であった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感染状況を鑑みながら、医療と教育、双方の考えをすり合わせるるとともに、教職員や児童生徒に感染予防行動をとるよう注意喚起を行い可能な限り学びを止めないよう努める。</li> <li>・情報交換・連携について行うアンケート時期や頻度等検討を行い情報交換・連携に努める。</li> </ul>
保護者・地域から信頼される学校にします。	保護者との連携強化と信頼関係の構築	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児児童生徒一人一人の状態を正しく把握して個別の指導計画を立て、保護者と学校との連携・協力関係を大切に実践する。</li> <li>・保護者集会や個人懇談、ケース会議において幼児児童生徒の教育的ニーズを把握し、保護者と連携して指導・支援を行う。</li> <li>・日々の情報交換を通して、学校、保護者と共通理解を図り、寄宿舎運営や寄宿舎生一人一人の指導や支援に役立てる。</li> <li>・日々の教育活動に対して信頼を得ることができるように、PTA役員と情報交換を随時行うよう留意する。</li> <li>・ホームページ掲載の記事を速やかにアップロードし、学習の様子を知らせる。</li> <li>・個別の進路相談や学級懇談を通して、生徒・保護者のニーズを把握する。進路懇談会、中学部・高等部集会等を通じて、進路に関する情報提供の場を設ける。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日々の連絡帳でのやり取りや懇談、保護者集会を通して、意見を聞き、迅速に質問等に対応することで理解していただいたり、安心していただいたりした。</li> <li>・保護者懇談会は実施できなかったが、送迎時の懇談やしげ特日誌を通して、積極的に情報発信を行い、相互理解に努めた。</li> <li>・今年度も保護者の意見や要望について、保護者から要望書の手紙で受け取り、関係各課から回答や対策を実施および報告して保護者と共通理解をもつことができた。</li> <li>・ホームページ掲載記事の記載担当との連携により速やかなアップロードができた。「しげ特日誌」はほぼ毎日更新した。</li> <li>・高等部集会、中学部集会で進路に関する情報を提供した。高等部に個別進路相談を行い、保護者生徒のニーズを把握し情報共有する場とした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者からの質問や意見を迅速に集約・対応するよう部内で連携を図る。必要に応じて関係者と情報共有をして対応する。</li> <li>・保護者の意見や要望、願いに耳を傾け、寄宿舎の体制作りを生かすとともに、家庭・学校・寄宿舎が連携し、寄宿舎一人一人の成長につなげていく。</li> <li>・保護者から信頼を得るべく保護者からの要望書を受けるかたちではなく、情報交換を必要に応じて行い、随時関係課と連携できる態勢を設けていく。</li> <li>・学校ホームページがより見やすくなるよう構成の工夫に努める。</li> <li>・小・中・高と連携をとり、必要があれば進路相談を個別に行う。</li> </ul>
	専門性を生かした多面的な支援の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校内外の窓口となって、幼児児童生徒・教職員・保護者等に対して、各関係機関等との連絡調整を行いつつ、教育相談や情報提供等を行う。また、必要に応じて支援会議をもつ等、幼児児童生徒一人一人に応じた支援を行う。</li> <li>・地域の小・中学校等のニーズの把握に努め、特別支援教育に関するセンターとしての役割を果たすように教育相談及び研修等の支援の充実を図る。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナウイルス感染防止に努めつつ、就学や進学に関する相談等を優先して教育相談を実施した。地域の小・中学校等の教育相談も事前に相談内容を確認し、時間を限定してニーズに応えるよう努めた。</li> <li>・感染症対策を取りながら必要に応じて支援会議を実施した。小学部4件、中学部1件、高等部1件であった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育相談や授業体験の時間や場所が制限される中実施しているが、必要な情報を正確に把握して、児童生徒がよりよい進路決定ができるように、関係機関との連携を丁寧に行っていく。</li> </ul>
	インクルーシブ教育システム構築に向けた教職員の専門性と実践的指導力の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外部専門家を活用して、地域の小・中学校等を含む教員の特別支援教育に関する専門性と実践的指導力を高めるための研修を実施する。</li> <li>・地域で学ぶ肢体不自由や病虚弱的幼児児童生徒の情報収集と関わる教員のニーズの把握に努め、必要に応じて訪問支援を行う。</li> <li>・学習系Wi-Fiや一人一台端末等情報機器の活用についての情報提供や研修会を開催して有効に使えるようにする。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外部専門家を活用して福祉サービスに関する研修を実施し、本校教職員145名が参加した。福祉サービスの用語や内容の理解、相談支援専門員の役割、一人暮らしをしている障がい当事者の事例の紹介等があり、児童生徒の将来の生活について考える上で大変勉強になった。</li> <li>・小・中学校への訪問支援を5件実施し、肢体不自由や病虚弱的児童生徒の支援に協力した。</li> <li>・地域の教職員も参加し、授業づくりについての研修をリモート形式で実施した。活動分析表の紹介があり、指導と評価の一体化について具体的な例が非常に勉強になった。指導の支援や手立ての工夫等、授業改善につながる内容を知ることができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小・中学校等への訪問支援の必要性を強く感じる。1回の訪問支援で終わることはほとんどなく、継続支援が必要な場合が多いので、毎年、年度初めに地域の小・中学校へ連絡し情報収集に努める。</li> <li>・外部専門家を活用してカリキュラムマネジメントや授業改善など、本校の実情に合った教育実践のアドバイスを受ける。</li> </ul>
	親切で誠意ある応対	<ul style="list-style-type: none"> <li>・窓口・電話応対は、迅速かつ親切に行い、保護者や地域との信頼を構築できるように努める。</li> <li>・連絡文書については、他者理解の観点のもと作成し、公平で適正な説明を行う。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新型コロナウイルス感染症対策に配慮した形での窓口対応を心掛けた。また、保護者に説明等が必要な書類については、事務課で情報を共有し、共通理解をした上で回答するようにした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予算の削減・有効活用に努め、新型コロナウイルス感染症対策に重点を置きながらも、学校の設備・教育環境に必要な物は何かを見極め、学校力向上を目指す。</li> </ul>
業務改善	ICTの活用や業務の見直し等による負担軽減	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校務支援システムなど、ICTを効果的に活用して業務の効率化を図る。また、業務の内容や執行方法、分担の見直しを行い、業務のスリム化を図る。</li> <li>・目標管理シートを活用して、教職員一人一人が自ら意識して業務改善に取り組む。</li> <li>・勤務状況管理システムによる勤務時間の適正管理や見える化により、全ての教職員が勤務時間に対して意識改革を行う。</li> <li>・夏季休業中に学校閉庁日を設定し、休暇を取得しやすい環境づくりを行う。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年度に引き続き、会議等をオンラインで実施することで、時間短縮や効率化につながった。また、慣例的に行ってきた業務全般の根本的な見直しを行うことで、スリム化することができた。</li> <li>・目標管理シート（チャレンジシート）については、目標を達成したことについての評価や、後の職務へのフィードバックが十分とは言えず、今後の課題として捉えている。</li> <li>・勤務状況管理システムに毎日の出勤時刻を入力することで、全教職員が自分の勤務時間を意識して業務の効率化を図ることができた。</li> <li>・学校閉庁日を4日間連続して設定することで、前後の休日と合わせて長期休暇を取得することが可能となった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度もコロナ対策で行事や会議等が中止になり、実施方法を変更したりした。この過程で業務の本来の目的や開催方法を見直すことができたので、今後も引き続いて業務のスリム化を通じた働き方改革に取り組んでいく。</li> <li>・学校のランドデザインを策定した上で目指す方向を明確にし、目標チャレンジシートを作成する。また、PDCAサイクルに基づいて実践しながら、実効性が表れる形で業務の効率化を図る。</li> <li>・定時退勤日や学校閉庁日の設定を継続してリフレッシュできる体制を取り、全ての教職員が健康に働ける職場環境を整える。</li> </ul>
	勤務時間の適正管理と意識改革				

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。